

魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名： 押塚 雄史 所属： 千葉県立東金特別支援学校 記録日： 令和2年2月11日

キーワード： 不登校、ネット依存、学習保証、自己分析、Pepper

【対象児の情報】

○学年 高等部1年生

○障害名 精神障がい ADHD 知的障がい

○障害と困難の内容

【実態】

- ・高等部より本校に入学。小学校3年生から登校渋りが始まり、高学年から不登校になる。
- ・中学校からネットゲーム依存の状態になり、昼夜逆転の生活である。
- ・セルフコントロールする力が弱く、衝動的な行動が見られる。
- ・不登校により社会経験が不足している。

【困り感・本人の願いについて】

- ・不登校と思われたくない（できることなら学校に行って勉強したり、友達や先生と話をしたりしたい）
- ・悩み事が言える友達が実世界に欲しい（だからネットが楽で依存してしまう）
- ・今までの学習空白を埋めたい。
- ・自分が登校できない時、学校では何をしているのか知りたい。
- ・朝起きられたら学校に行きたい。しかし、なかなか生活リズムを整えられない。

【活動目的】

○当初のねらい

- ①eラーニング学習支援サービスを利用し、本人の願いでもある学習空白を埋める学習を進める。
- ②スケジュール管理や生活リズムの調整を自分で行き、規則正しい生活を送れるようにする。
- ③登校できない際の学習を保証するだけでなく、教師や友達とのやりとりができるようにする。
- ④Pepper のプログラミング（RoboBlocks）を通して、人の役に立つ経験を増やし、自己有用感を育てる。
- ⑤思考を視覚化し、理解しやすい形で自己分析することを通して、自身の課題や目標を見つける。

①について

- ・「palstep」を活用し、遠隔で実態にあった学習を進める。

②について

- ・「EchoSpot」のリマインダーや、アクティビティの履歴を残せる機能を活用して、自己管理やデータに基づいたフィードバックを進める。

③について

- ・「EchoSpot」のビデオ通話機能やメッセージ機能を活用し、教室と自宅を繋ぎ、欠席時でも学習に参加したり、人とやりとりしたりできるようにする。

④について

- ・プログラミングを通して、友達と協力して活動することの経験を増やす。

⑤について

- ・マインドマップを活用して、思考を視覚化した自己分析を行う。

○実施期間 平成31年4月～現在

○実施者 押塚雄史

○実施者と対象児の関係 担任

【活動内容と対象児の変化】

対象児の事前の状況

<学習面>

- ・小学校3年生程度の読み書きができる（不登校になった小学3年生で学習が止まっている）
- ・算数も小学校3年生程度。

<言語、コミュニケーション面>

- ・日常会話ができ、学校での教師や友達との会話を楽しむ。
- ・学校では、注意や指導を受けても素直に受け入れ、行動を修正することができる。

<行動面>

- ・学校では、悩んだり困ったりする様子を見せない。（教師や友達には、悩んでいる自分を見せたくない）
- ・学校での様子と、家庭での様子は全く異なる。

<タブレットの操作について>

- ・ローマ字対応表があれば時間をかけて入力できる。
- ・スマホやタブレットは、フリック入力で間違えることなく入力ができる。
- ・本人所有のスマホがあるが、ほとんど会話系サイトの利用、ネットゲームに使用している。



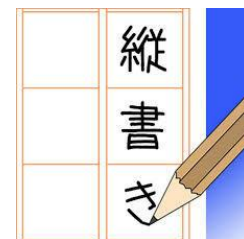
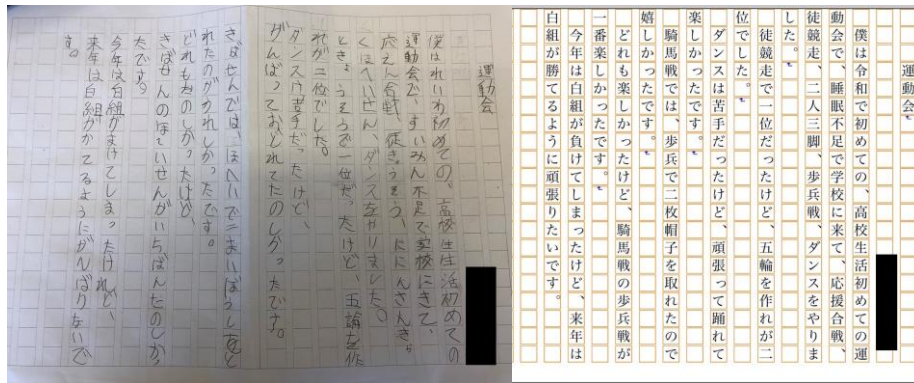
・活動の具体的内容と対象児の事後の変化

【実践内容】

①学習空白を埋めるだけでなく、登校できない際の学習保証を行う（5月～）

「palstep」の活用で、小学校3年生からの国語、算数の学習に取り組むようにした。家庭だけで使うのではなく、学校の教科の時間も palstep を使った学習を進めた。タブレットの操作にも慣れており、紙媒体の学習よりもやりやすい様子。

「縦書きエディター」の活用



運動会について書いたAさんの作文

運動会の作文を書いたAさん。文章を書くことはできたが、1段目を全て1マス空ける、文の途中で改行する、など原稿用紙に慣れていない様子「段落落ち」「文の途中で改行」等がみられた。本人も「見せたくない」と言い、教室に掲示することを拒んだ。

そこで、「縦書きエディター」を使い、マスの空け方や改行のルールについて説明しながらタブレットで作文を書くようにした。入力、変換などはスムーズで、自筆では平仮名で書いていた言葉も正しい漢字に直して仕上げることもできた。入力であれば、使える漢字が増えることに気付いた。シンプルなアプリであるが、原稿用紙に書く練習になり、書き方を覚える手助けとなった。完成した原稿を自分で確認したAさんは「印刷して掲示していいですか?」と言い、作文を友達に見せることを快く受け入れた。アプリを使用して正しく書けるようになり自信に繋がった。Aさんが初めて「タブレットを学習に使える」と実感した瞬間であった。

②Echo を活用したスケジュール管理（4月～）

・Aさんの家に EchoSpot を設置し、目覚まし機能やスケジュール機能を使い、自分で生活リズムを整え、学校の行事予定も知れるようにした。

機能を使いこなすものの、「目覚ましをかける時間がそもそも遅い」「音楽をかけてしまう」様子が見られ、夜眠らずに登校してきていることが窺え、家庭で自分で生活を管理することに難しさを感じた。しかし、本人は登校できない日であっても毎日目覚ましをかけている様子が見られ、「登校したい」という気持ちは伝わってきた。登校後、夜のことについて画面を見ながら本人と確認し、生活リズムの見直しについて話をした。



ある日の、
Echo への呼
びかけ履歴。

切り札流して	今日 05:41 am	■
アレクサ	今日 05:41 am	■
ギリギリ流して	今日 05:41 am	■
アレクサ	今日 05:41 am	■
ハッピーンセイイザ流して	今日 05:35 am	■
アレクサ	今日 05:35 am	■
ゲッコウガ流して	今日 05:25 am	■
アレクサ	今日 05:25 am	■
月光流して	今日 05:19 am	■
アレクサ	今日 05:19 am	■
明日の六時にアラームセットして	今日 02:27 am	■
アレクサ	今日 02:27 am	■
六時に起こして	今日 01:47 am	■
アレクサ		

③「ビデオ通話」を活用した遠隔でのやりとり

自分が登校できない時の学校や友達の様子を気にするAさんの為に、教室に Echoshow を設置し、帰りの会で友達からビデオ通話をかけ、1日の出来事や明日の持ち物や予定などを伝えるようにした。ビデオ通話に出ない日もあったが、友達と会話した次の日は登校できる様子が見られた。

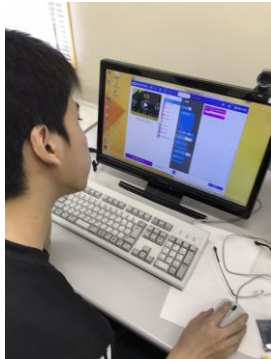


欠席時は、クラスの友達
とビデオ通話をする

④Pepper のプログラミング（RoboBlocks）を通して、人の役に立つ経験を増やし、自己有用感を育てる（5月～）

プログラミングに関心があり、RoboBlocks の操作はすぐに覚えることができた。

元々ICT機器に強みのあるAさん、知識もあり、プログラミングでもその能力を発揮する。2学期からはプログラミングチームを結成し、学校行事で使用する Pepper のプログラミングを作成。これにより、友達や先輩との関わりも増えていった。



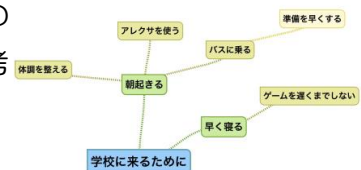
文化祭の受付アプリを作成



⑤マインドマップを使い、思考を整理する。自己分析を進める。（8月～）

思考を「見える化」し、やるべきことや必要なこと、行動の優先順位などについて考え、自分の生活を見つめ直す。

夏休みの終わりに、2学期以降の登校について「学校に来るために必要なこと」について考えた。衝動的な行動をとりやすい傾向にあり、物事や考えを持続させることに課題のあるAさんにとって、思考を整理し、具体的な目標を見つけ、自身の課題を考えるきっかけとなった。



【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

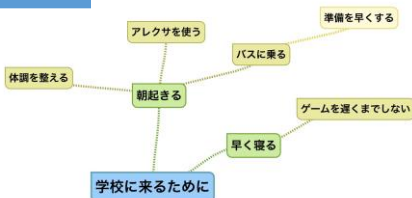
- ① ネットゲーム依存の状態にあったAさんであったが、学校での友達や教師との「リアルな関わり」を積み重ねたことで、自分の今の生活を改めていこうという気持ちを育てることができたのではないかと。
- ② マインドマップを通して、思考や自分の生活を視覚化して自己分析を進めたことで、自身の課題に気付くことができ、登校への意識を高めることができたのではないかと。
- ③ ネット依存であるAさんにとって、「ネット環境を取り上げる」のではなく、「ネットへの強み」を生かした支援をしたことが効果的だったのではないかと。

・エビデンス(具体的数値など)

① マインドマップでの思考の広がり

- ・ 8月と12月で、同じ「学校に来るために」というテーマで思考の整理、現状の確認を行った。
- ・ 8月に比べて、大きく広がり現状への対策まで考えられるようになってきていること、「人」に関わる記述が増えていることから、人と協力して活動を積み重ねたこと、欠席時も人と繋がっていることを確認できるように支援した結果が窺えた。

8月



12月



「朝起きること」

- ・ 朝に課題があることを自覚し始めた。
- ・ Aさんなりの工夫」について考え、前日の夜に準備をすれば良い、などと考えることができた。
- ・ 体調を整えるために、これまで摂っていなかった朝食を摂ることを考えた。

「学校に行くこと」

- ・ 学校に行く理由の大きな部分を占めるのは「人」である。
- ・ 「リアル」を楽しめるようになってきていると考えられる。
- ・ 学校での活動を楽しいと思えるようになってきている。

「早く寝ること」

- ・ 夜寝ない原因の一つでもある「ゲーム」について意識して早く切り上げるようにし始めた。
- ・ ネットの友人から誘われても「断る」という選択をし、寝ることを考え始めた。

「ヘルパーを使うこと」

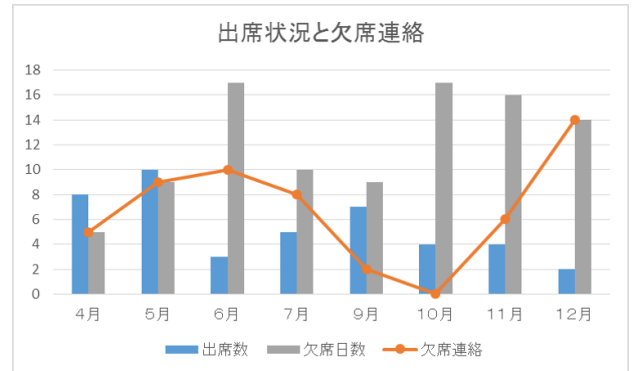
- ・ これまで拒否し続けていた「ヘルパー」の利用を考え始めた。
- ・ 「人」を信用できるようになってきたのではないかと。

②出欠席の状況と、欠席連絡について

9月上旬は登校へのモチベーションが高く、週3日の登校を自分で決め、登校するが、9月の台風15号の被害で家のWi-Fi機器が壊れたことをきっかけに不安定になった。ネット依存の傾向にあるAさんにとって、「ネットから遮断されること」は大きなストレスになることを感じ取ったエピソードであった。

それをきっかけに、欠席時に連絡をしたり、友達との関わりも拒絶したりする状態になるが、登校した際に「休んでいても繋がっていること」や「連絡をすることの必要性」について話をしたことで、体調が悪く欠席した時も確実に欠席連絡をすることができるようになった。

出席数は、2学期になり落ち込んだが、面談をしたり、登校時にグループで人と関わり合いながら学習をしたりすることで、学校や友達と繋がっていることを意識できるようになったのではないかと考える。



③palstepでの学習について

欠席時の学習保証や、学習空白を埋める為に始めたpalstepでの学習は、欠席が続き面談をした11月以降、意識をもって取り組めるようになった。特に12月は出席数が2日しかなかったが、palstepでの学習は11日あり、欠席しても勉強をしよう、学校と繋がってみたい、という気持ちの現れであると考えます。

	出席数	欠席数	Palstepログイン回数
7月	5	10	22
8月	0	0	14
9月	7	9	5
10月	4	17	3
11月	4	16	8
12月	2	14	11

得意な国語は、学習空白のある小学3年生から始めて、小学5年生まで終えることができた。数学は、わからない部分があると、登校すると教師に質問をして取り組むことができた。

AさんとICTだからできたこと

- ①Echo等、遠隔で支援する機器があったことで、学校に来られない時でも友達と顔を合わせたやりとりが可能になった。
- ②データを積み重ねて振り返ったり、思考を視覚化したりと、わかりやすい形でのフィードバックをすることができた。
- ③ネット依存で、タブレット機器はゲームやチャットにしか使っていなかったAさんにとって、学習や日常生活に活用し、それが自分の役に立つものだと思えたことは大きなことであると考えます。
- ④palstepで登校できないときの学習を保証し、過去の学習空白を少しずつ埋めていくことができた。

今後の支援について

自己分析を通して、少しずつ自分自身の課題に気づき始めたAさんだが、問題の不明確さや、その問題に対処する方法を見つけきれず、解決に向かうモチベーションが低いことが課題である。具体的に何がどう問題になっているかを明確にして、目指すべきゴールも具体的に必要があると考えます。

また、責任転嫁することで自分を守る傾向のあるAさんなので、解決方法も、自分が選んで自分が決める必要がある。例えば「11時までには寝る」「遅刻しても学校に行く」「ゲームは早起きしてやる」など、実際に計画を実施してみて、どんな効果があったか、継続できそうかなどを評価していくことで、セルフコントロールできるようになればと考えます。